

## 「祭司ザカリヤ」

ルカの福音書 1:8~22

### はじめに

今回は、祭司ザカリヤとその妻エリサベツの中に、イスラエルの父祖アブラハムとその妻サラが「型」として表されており、彼らに誓われた神の誓い、イスラエルに対する神のご計画が表されていることを述べました。今日の箇所にも引き続きザカリヤが登場しますが、場面は変わってザカリヤの祭司としての務め、働きが具体的に描かれています。そこに神の御言葉をたずさえた御使いが現れます。なぜこの状況、このタイミング、この場所でそれらは起こったのでしょうか。それにはすべて意味があります。神のご計画の視点から今日も読み解いてまいりましょう。

### 1. 香と祈り

ルカの福音書【新改訳 2017】

1:8 さてザカリヤは、自分の組が当番で、神の前で祭司の務めをしていたとき、

1:9 祭司職の慣習によってくじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。

1:10 彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた。

ザカリヤが選ばれた祭司として神殿の聖所に入り、「香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた」という状況が描かれています。さも当然の事のように記されていますが、聖所で香の質やそれをたくこと自体はいろいろと定められてはいるものの、それと大勢の民の祈りが同時進行で行われるというような規定や、実際にそのような形式が行われたという記述は、旧約聖書にはありません。もちろん実際にそのように行われていたのですから聖書以外のユダヤ人たちの規定からのものではあると思います。しかしこの記述を聖書によって解釈する、すなわち聖書の御言葉を聖書の御言葉によって解釈するならば、この記述はヨハネの黙示録 8:4 と結びつきます。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

8:1 子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。

8:3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。

8:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

この記述は世の終わりに起こる出来事についての預言であり、それを比喩的に描いたたとえ「型」の一つです。ここでも確かに「香の煙は、聖徒たちの祈りとともに」献げられており、ザカリヤが行った祭司のそれと合致します。つまりザカリヤが行った祭司の務めについての記述は、単なる状況説明などではなく、また旧約時代の礼拝やイスラエルの歴史を想起させるものでもなく、終わりの日、やがて必ず起こる世の終わりについての出来事、神のご計画を指し示したもののなのです。では実際、具体的にこの預言、たとえばどのような出来事を表しているのでしょうか。

## 2. 第七の封印

それはまず「子羊が第七の封印を解いたとき」と表現される場面のものであり、これが一体いつの時点を示しているのかを理解するためには、それ以前の第一から第六の封印が解かれたときのことを知らなければなりません。

### ① 第一の封印 (ヨハネ黙示録 6:1~2)

「また私は、子羊が七つの封印の一つを解くのを見た…。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得るために出て行った。」

ここに描かれている白い馬に乗り、弓を持つ者とは、獣と呼ばれる反キリストです。弓という武器の特性上、彼は予想もしないところから、まさに矢のように現れます。彼の登場こそがこの七つの封印の裁きの時代の幕開けとなります。彼は初め、世界を統一する英雄として見られ、その様はユダヤ人たちさえも騙し、来るべき神の御子メシアだと誤解させます。

### ② 第二の封印 (6:3~4)

「子羊が第二の封印を解いたとき…火のように赤い馬が出て来た。それに乗っている者は、地から平和を奪い取ることが許された。人々が互いに殺し合うようになるためである。また、彼に大きな剣が与えられた。」

初めは平和の使者のようだった獣がここで変貌し、その本性を現します。獣は自分を神と宣言し、これに従わない者を殺し始めます。

### ③ 第三の封印 (6:5~6)

「子羊が第三の封印を解いたとき…すると見よ、黒い馬がいた。これに乗っている者は秤を手を持っていた。…オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない。」

「秤」は商売の象徴です。獣は全世界の経済を掌握し、自分に従わない者は売ることも買うこともできないようにします。ただし「オリーブ油とぶどう酒に害を与えてはいけない」とあり、獣の支配の中にあっても「神のしもべたち…十四万四千人 (7:3~4)」のユダヤ人は守られます。

### ④ 第四の封印 (6:7~8)

「子羊が第四の封印を解いたとき…青ざめた馬がいた。これに乗っている者の名は「死」で、よみがそれに従っていた。彼らに、地上の四分の一を支配して、剣と飢饉と死病と地の獣によって殺す権威が与えられた。」

この「青ざめた馬」に乗っている者は唯一名が冠されており、あえて名が付けられているということは本来は名乗ったりの名を呼ばれたりする者ではない、つまり人ではないということであり、これまでの馬に乗る者とは別の存在です。地上人口の四分の一を死に至らしめる「剣と飢饉と死病と地の獣」による数々の災いが擬人化されたものがそれです。

⑤ 第五の封印 (6:9~11)

「子羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てた証しのゆえに殺された者たちのたましいが、祭壇の下にいるのを見た。彼ら一人ひとりに白い衣が与えられ…同じように殺されようとしている兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように言い渡された。」

「神のことば」を信じる多くの者のたましいが白い衣を与えられ、「もうしばらくの間、休んでいる」ことが記されています。この時点ではまだ誰も復活していません。つまり私たちが待ち望んでいる携挙「キリストにある死者のよみがえり（1テサロニケ 4:16）」も、この時点ではまだ起こっていないということになります。

⑥ 第六の封印 (6:12~17)

「また私は見た。子羊が第六の封印を解いたとき、大きな地震が起こった。太陽は毛織りの粗布のように黒くなり、月の全面が血のようになった。そして天の星が地上に落ちた。それは、いちじくが大風に揺さぶられて、青い実を落とすようであった。天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山と島は、かつてあった場所から移された。地の王たち、高官たち、千人隊長たち、金持ちたち、力ある者たち、すべての奴隷と自由人が、洞穴と山の岩間に身を隠した。そして、山々や岩に向かって言った。「私たちの上に崩れ落ちて、御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」

白い光を放つ太陽、月が、黒くまた赤く変貌する、このたとえもまた獣と呼ばれる反キリストを表しています。先ほどは白い馬が赤や黒に変わるというたとえでした。そのように捉えるならば、「天の星」「いちじく、青い実」とは文字通りの意味ではなく、「天」はエルサレムの神殿、「星、いちじく、青い実」とはそこに仕えている祭司たち、ユダヤ人たちです。彼らは獣によって神殿から落とされる、追い出されるのです。そして「天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり」とは神殿において礼拝がささげられなくなるという意味で、「すべての山と島は、かつてあった場所から移された」とは、ユダヤ人たちが命を狙われ、エルサレムおよび彼らの土地から逃げ出さなければならない状況になるということを表しているのです。そして彼らは「洞穴と山の岩間に身を隠した」とあり、ボツラ「岩」と呼ばれる場所に身を隠します。そこで彼らは「御座に着いておられる方の御顔と、子羊の御怒りから私たちを隠してくれ。神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう。」と言って、ついに自分たちの誤り、すなわち神の子羊であるイエシュアを否定してきた罪、これを十字架にかけて殺した罪を認め、悔い改めるのです。

⑦ 第七の封印 (8:1~5)

「子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラツパが与えられた。また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。」

さて、ではよいよ今日の本題の「第七の封印」についてです。述べたように、この預言、たとえば表す出来事は、第一の封印で現れた獣が、白から赤、黒へと色が変わるようにその本性を現し、エルサレム

の神殿から祭司たちを追い出し、ユダヤ人たちの命を狙って追い回し始めたその後起こるものであるということです。しかし「半時間ほど」とあるように、その差はごく短いものです。ではその時に何が起こるのか、その秘密は「祈り」という言葉に隠されています。ヘブル語でこれをパーラル(קָרָא)と言い、その最初の言及は創世記 20:7 にあります。

#### 創世記【新改訳 2017】

20:7 今、あの人の妻をあの人に返しなさい。あの人は預言者で、あなたのために祈ってくれるだろう。そして、いのちを得なさい。しかし、返さなければ、あなたも、あなたに属するすべての者も、必ず死ぬことを承知していなさい。

これは神がゲラルという地の王アビメレクに語られたものです。彼はアブラハムの妻であるサラを自分の妃にしようと召し入れたために、神の怒りを買ひ、死の宣告を受けます。しかし彼がサラを返すならば、神は預言者アブラハムに「祈って」もらうことによって「いのちを得」る、救われると告げられました。ここに聖書で最初のパーラル「祈る」があり、それは「いのちを得なさい」とあるように、死を免れ、生き残ること、助かること、救われることを指しています。このように、パーラル「祈る」とは本来、「いのちを得る」者、ことにそれはゲラルのアビメレクの国に象徴される異邦人のことを表しており、その救いのための祈りが「神の御前に立ち上った」とはすなわち、異邦人の教会が神の御前に立ち上る、新しい「いのちを得て」、朽ちない身体によみがえって、引き上げられることを表しているのです。それはもちろんイエシュアの空中再臨による教会の携拳の事実を指し示しています。第五の封印の時には、まだ満たされていなかったキリストにある死者という名の「香」が、第七の封印の時に完全に満たされ、御使いたちの頭であり真の大祭司であるイエシュアの手によってそれは天へと立ち上る、携拳されていくのです。ここまでの経緯を簡単にまとめますと、

- ・ 第一の封印：反キリストの登場
- ・ 第二の封印：反キリストの変貌
- ・ 第三の封印：反キリストの支配
- ・ 第四の封印：戦争、飢饉、災害、疫病により地上の四分の一の人が死ぬ。
- ・ 第五の封印：神のことばを信じて死んだ者（キリストにある死者）のたましいに白い衣が与えられるが、まだ休んでいる（よみがえっていない）。
- ・ 第六の封印：反キリストによりエルサレム神殿が奪われ、ユダヤ人への大迫害が始まる。
- ・ 第七の封印：教会の携拳と七つのラッパの裁きの始まり、さらにその後七つの鉢の裁きへと続く。

となります。このような神のご計画が終わりの日に続けざまに起こることが「彼が香をたく間、外では大勢の民がみな祈っていた」という祭司ザカリヤが行った祭司の務めについての記述には表されているのです。（なお、この解釈については諸説あります）

## 2. 取り乱し

#### ルカの福音書【新改訳 2017】

1:11 すると、主の使いが彼に現れて、香の祭壇の右に立った。

1:12 これを見たザカリヤは取り乱し、恐怖に襲われた。

第七の封印が解かれ、教会が携挙された後、七つのラッパの裁きと呼ばれる、凄まじい災いがこの地上を、ユダヤ人たちを襲います（ヨハネの黙示録 8:7～9:21）。ここでのザカリヤの「取り乱し、恐怖襲われた」という記述にはその事実が指し示されているのです。彼は「主の使い」御使いが「右に立った」のを「見た」ためにそのようになりました。ヘブル語で「右（に行く）」を意味するヤーマン(יָמִין)は本来、「別れる、分けること」すなわち裁くことを意味する言葉です（創世記 13:9）。七つのラッパの裁きとは、七つのラッパを与えられた御使いたちによる裁きです。

しかしユダヤ人たちにとっての本当の恐怖、驚きは、天変地異や迫害などではありません。ここでのザカリヤの「取り乱し」はヘブル語ではバーハル(בְּהַל)と言い、これは本来、身の危険を感じる恐れではなく、予想もしていなかった衝撃の事実、真実を明かされた時に抱く非常な「驚き」驚愕を意味する言葉だからです（創世記 45:3）。かつて自分たちが十字架につけて殺したイエシュアこそが、真の神の御子メシアであったという、この衝撃の事実を思い知らされることです。自分たちが命がけで信じてきた神の、その御子を自分たちが殺してしまったという事実、その担いきれない重さの罪責感こそが、このザカリヤの様子には表されているのです。そうでなければこの時の彼の様子ははっきり言って異常です。なにせ彼は信仰厚く「神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた」のですから、本来なら旧約聖書に何度も登場する御使いを見て、これほど驚くことはなかったはず。このように、ザカリヤの驚きは、イエシュアがメシアであることを知ったユダヤ人たちの驚きを表しているのです。未だ彼らはこの境地から遠く、今日もなおイエシュアを拒み続けていますが、やがてその事実、目が開かれ、大いに驚き、大いに恐れ、そして「神と子羊の御怒りの、大いなる日が来たからだ。だれがそれに耐えられよう（黙示録 6:17）。」と言って、激しく嘆くことになります（ゼカリヤ書 12:10）。

### 3. 口がきけなくなる

1:13 御使いは彼に言った。「恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。

1:14 その子はあなたにとって、あふれるばかりの喜びとなり、多くの人もその誕生を喜びます。

1:15 その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、

1:16 イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせます。

1:17 彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」

1:18 ザカリヤは御使いに言った。「私はそのようなことを、何によって知ることができるでしょうか。この私は年寄りですし、妻ももう年をとっています。」

1:19 御使いは彼に答えた。「この私は神の前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この良い知らせを伝えるために遣わされたのです。

1:20 見なさい。これらのことが起こる日まで、あなたは口がきけなくなり、話せなくなります。その時が来れば実現する私のことばを、あなたが信じなかったからです。」

1:21 民はザカリヤを待っていたが、神殿で手間取っているので、不思議に思っていた。

1:22 やがて彼は出て来たが、彼らに話をするができなかった。それで、彼が神殿で幻を見たことが分かった。ザカリヤは彼らに合図をするだけで、口がきけないままであった。

御使いガブリエルはザカリヤとエリサベツからヨハネが生まれることを預言していますが、それは同時にヨハネの中に「型」として表されているメシア、イエシュアを指し示しているのです。なぜなら「**イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせ**」るのは、究極的にはやがて地上再臨されるイエシュアだからです。そのイエシュアの働きをガブリエルはいろいろと表現を変えて説明していますが、最後にはこれを一つのしるしに集約しています。それは「**口がきけなく**」なるということです。これはヘブル語によってでなければ絶対にわからない事実です。この「**口がきけなくなる**」ことをアーラム(אָלֵם)と言い、その最初の言及は創世記 37:7 です。

#### 創世記【新改訳 2017】

37:6 ヨセフは彼らに言った。「私が見たこの夢について聞いてください。

37:7 見ると、私たちは畑で**束を作っていました**。すると突然、私の束が起き上がり、まっすぐに立ちました。そしてなんと、兄さんたちの束が周りに来て、私の束を伏し拝んだのです。」

これはアブラハムの子イサクの子、イスラエルの子ヨセフが見た夢についてのものです。ここで「**束を作っていました**」と訳されているのが聖書で最初のアーラムです。束を束ねること、それがアーラムの本来の意味です。これがなぜ「口がきけなくなる」という意味になるのかと言いますと、皆さんの上の唇と下の唇を束ねて、くっつけて、口を結んでみればわかります。そうです、話せなくなるというわけです。しかしそれは本来、「イスラエルの子らを収穫する、一つに束ねる、一つに集める」という意味を持った言葉なのです。神がイスラエルの民になさりたいご計画とはまさにこの一事につきますのです。ですからザカリヤが口をきけなくされたのは、彼の不信仰に対する戒め、罰などではありません。このように神は、イエシュアはやがてイスラエルの民をご自分のもとに束ねる、集める、ということが表されているのです。

#### 4. 信じても信じなくても

神のご計画というものは何ものによっても決して妨げられません。また逆にそれを早めたり、変更を加えたりすることもできません。そしてそれは誰が信じても信じなくても定められた時が来れば必ず起ります。たとえそれが神の掟を落ち度なく行う祭司であろうが、選ばれた民イスラエルであろうが、聖霊に満たされたクリスチャンであろうが、聖書を熟知した教師であろうが、または御使いであろうが悪魔であろうが、それに手を加えることは一切できません。決して揺らぐことのないこの神のご計画に、私たちが目を留める時、そこにこそ揺らぐことのない信仰が生まれます。今日のザカリヤがまさにその良い見本です。彼は祭司の規定に従い、落ち度なくそれを行っていました。そこに神のご計画が表されていました。その一方で彼は御使いの言葉を信じず、これを否定しました。しかしそこにも神のご計画は表されました。私たちが何をしても、あるいは何をしなくても、神のご計画は変わりません。ですから私たちが何かをしてそれがうまくいったとしても、大したことはありません。また逆に、何か失敗をしたとしても、落ち込む必要はありません。あなたのその言動、行動、働きが神のご計画に支障をきたすことは全くありませんのでご安心ください。はっきり申し上げて神が目を留めておられるのは人の姿、行い、生き方考え方ではありません。ただご自分が御子イエシュアによってなそうとしておられるご計画のみです。ですから私たちも、自分や、あるいは人の行いに目を留めるのではなく、ただ神のご計画だけに目を留めようではありませんか。そのための聖霊の助けが今年一年、一人ひとりの上にありますように。